

審査論文の要旨

本論文は、上代文学において重要な作品でありながら研究が立ち後れている懐風藻について、個々の詩語の性格や散文の構成、叙述の形式、書名の由来などの詳細な分析を通して、その編纂意図を解明し、平安時代以降の日本漢文学史を広く展望しようとする意欲的な論文であり、全三部計七章の論考から成る。

第一部「詩語をめぐって」では、まず懐風藻の詩語を検証する。天平勝宝三年（751年）に成立し、日本で編纂された現存最古の漢詩文集である懐風藻は、当時の漢籍受容の実態を知る上で不可欠の作品であり、その詩語は中国の漢魏六朝期から唐代初期（3世紀後半～8世紀初頭）にかけての詩文との関連性の探究が基本的な課題とされてきた。ところが懐風藻にはしばしばそうした時代の詩文にはまったくと言えるほど例証のない詩語が見出され、それらは「当時の日本人が漢籍の学びに未熟なために誤って漢字を用いたもの」と評されたり、「日本人の感覚で勝手に漢字を組み合わせた和製漢語、つまり和臭」と規定されたりと、否定的な評価を受けることが多く、それが懐風藻の漢詩そのものの低評価に繋がり、引いては研究の遅滞をも生んできた。

川上はその状況を打開するために、そうした例証のない語に仮に「用例未見語」という呼称を与え、そのような語を用いることによって詩語相互の関連性に新たな意味が導かれること、その詩の主題に即した独自の表現効果が生み出されること、という積極的な評価を与えることが可能となる視点を設定する。具体的には「用例未見語」を「未見」の性格（たとえば、そのものは未見だが類義語は用例がある、あるいは故事への連想による、など）によって細分化し、その現れ方を総括し価値を評価する（第一章）。

また従来まず検証対象となった『文選』や『芸文類聚』などの基本的に伝統的な詩語を用いることの多い文献とは異なる分野へ視野を広げ、伝奇小説『遊仙窟』など白話語彙を多用する文献や楽府の歌辞、また『千字文』といった初学書にも注目して、人物にまつわる故事の短縮語など、懐風藻の詩語の多様性を明らかにした（第二章、第三章）。

用例の見られない詩語を、「用例未見語」として全般的で詳細な検証を行うことで見直した結果、懐風藻における詩作は、理解不足や誤解の可能性も含めた、漢字・漢語に対する当時の認識に基づく独自の「日本的な」発想による漢詩のあり方を模索していた当時の試みを示すものであり、巧拙の評価をすべきではないこと、そして「用例未見語」は「未熟」、「和臭」ではなく、その試みをいっそう明らかにする上で極めて有効な詩語であることを示した。すなわち積極的な詩作の試みを示すものとして把握することで、その独自性が後の平安漢詩文の世界へと継承発展していった過程を展望することも可能となった。

第二部「人物伝をめぐって」では、主に詩が注目されてきた研究史を顧みて、散文部分に着目する。懐風藻には作者の詩の前にそれらの人物の経歴、人物評、没年齢など、時には筆者の感慨までも述べる文章がしばしば付されることがある（詩人64名中9名）。そ

れら「人物伝」とも「詩人伝」とも呼ばれる文章がどのような人物に付されるかを改めて見れば、大友皇子や大津皇子といった不遇とも悲劇的とも言える人物や僧侶（入唐僧）に多いことが知られる。そのような「人物伝」が詩を網羅的に集成した総集としては例外的であり、かつ天皇や藤原不比等ら権勢者側には見られないことの意味、即ち編纂意図を検証する必要がある。ここではそれらの「人物伝」が通常想定される史書の列伝などの客観的な伝記とは異なり、葬送儀礼に際して作られ唱えられる誄と類似の内容であることが指摘され、日本で作られた誄の検証を通して延暦七年（788年）成立の『延暦僧録』などに見られる僧侶伝編纂や墓誌銘との関連性にも論及する（第一章）。

さらにそもそも懐風藻の詩人別配列が『珠英集』、『河岳英霊集』、『篋中集』などの「唐人選唐詩」（唐代の詩人別撰集）と共通し、それらの多くが持つ篇額と呼ばれる詩人評とも共通点を持つことから、「唐人選唐詩」を懐風藻の構成の着想元とする可能性を追求し、人物評や筆者の感慨が見られる点など、内容上での共通点の意義を明らかにする（第二章）。これらの検証を通して「人物伝」は「唐人選唐詩」における編纂意図を背景の一つとし、誄や墓誌銘などを原資料として成り立つ構造である可能性を示唆して、懐風藻編纂意図を解明する一指標として位置付ける。

第三部「序と書名をめぐって」では、これまでの検証を踏まえて、散文の中でも最も長大で本論文の主眼である編纂意図に深く関わる序文の考証と、そこで一定の表明がなされている「懐風藻」という書名の意義そのものの解明が展開される。序文については、従来『文選』との比較から考証することが定説であったが、『文選』に加えてここでも「唐人選唐詩」に着目し、序文に述べられる編纂動機との共通性を明らかにした（第一章）。

そしてその序文の意義を見直す上で、懐風藻という書名の「懐」、「風」、「藻」それぞれの意味と用法についての従来の見解を検証し、詩文の総集の書名であることの意義を質した。「風声を惜しむ」、「先哲の遺風を忘れず」という表現から、従来「詩風」と見られてきた「風」の概念は、「風声」の詳細な分析によって詩人の徳を示すものと見られ、「遺風」は「遺徳」と解せること、また「藻」は詩文の比喩として常用のものではあっても総集の名としての適格性に乏しいこと、そのため当時中国と日本の両国においても、佚書を除けば書名末尾に「藻」を持つ書の存在が確定できないこと。これらが極めて重要な論点として指摘された。即ち、懐風藻という書名は「古人の遺風（遺徳）を懐かしむべき詩文」とでも読み直すことが適切であると主張し、人物伝の存在とも相俟って編纂意図につながれば、詩人の顕彰に関心を向けた総集としての書名であろうと結論づける（第二章）。

最後に結語として、懐風藻の編纂意図の解明に向けた研究として、詩語の分析と再評価、人物伝と序文の再読によって、懐風藻の編者の試みた総集のあり方を問い直したものと本論文を位置付ける。懐風藻の複雑な様相を解明するための本論文の様々な観点からの探究の有効性を生かして、今後も本論文での試みの発展によって日本漢文学の形成過程を探り、和漢比較という観点から日本文学へのアプローチへと繋げることを展望して結びとする。